

平成30年～令和3年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)
自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人北九州市芸術文化振興財団		
施 設 名	北九州芸術劇場		
助 成 対 象 活 動 名	創造都市=クリエイティブ・シティ実現に向けた『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』		
助 成 期 間	5		(年間)
内 定 額	平成30年度	38,052	(千円)
	平成31年度	34,471	
	令和2年度	33,232	
	令和3年度	34,728	

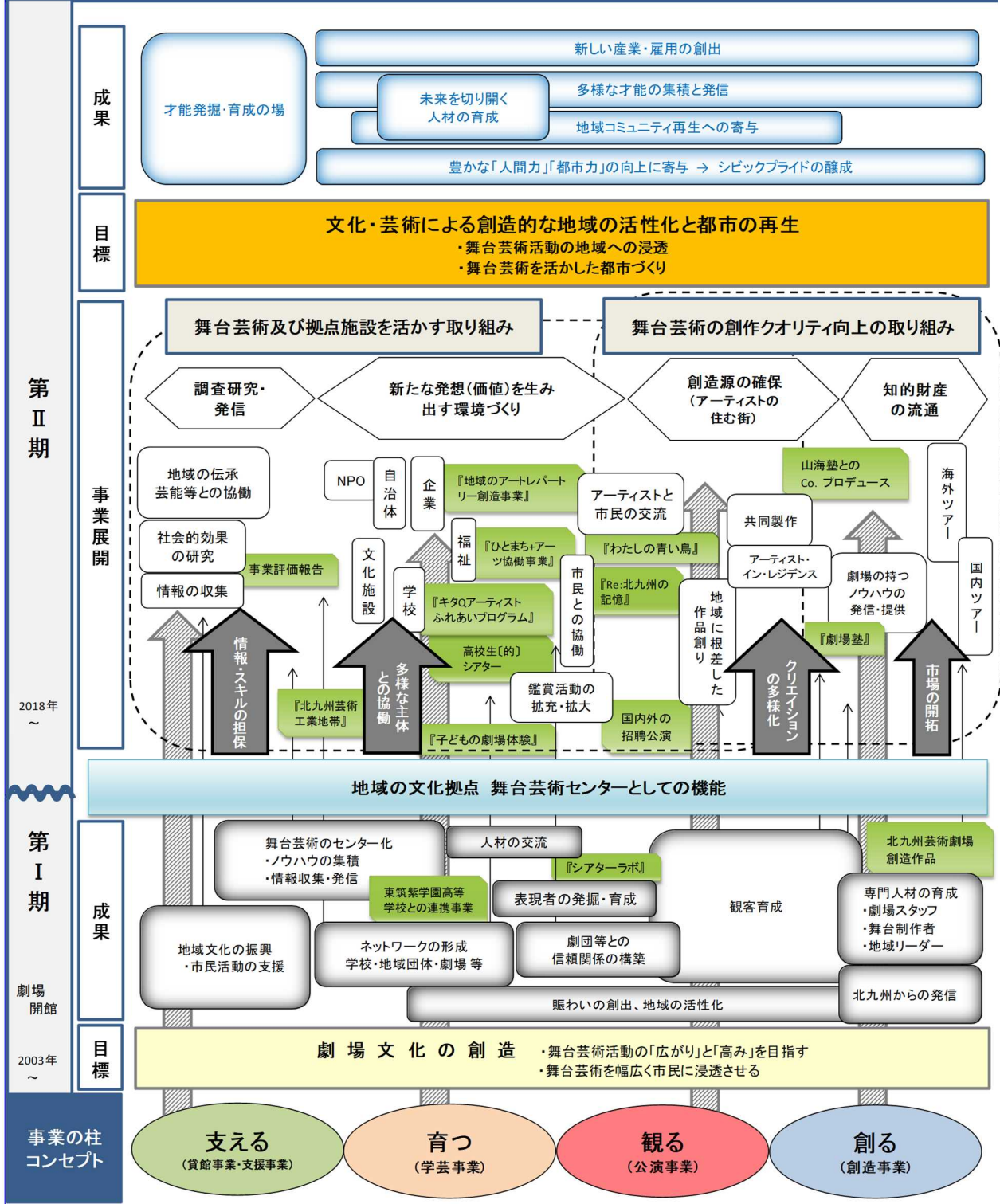
1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図 (概念図)

(事業名) 創造都市=クリエイティブ・シティ実現に向けた『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』

北九州芸術劇場 長期ビジョンにおける事業展開モデル全体図



(2) 令和3年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	イデビアン・クルー「義務」	4月9日	振付・演出：井手茂太、音楽：原摩利彦、出演：斉藤美音子、依田朋子、宮下今日子、福島彩子 他	目標値	393
		中劇場		実績値	188
2	山海塾「かがみの隠喩の彼方ーかげみ」リ・クリエーション	5月16日	演出・振付・デザイン：天児牛大 演出助手：蟬丸、舞踏手：竹内晶、市原昭仁、松岡大、石井則仁 他	目標値	393
		中劇場		実績値	281
3	セレノグラフィカ ダンス公演「無言歌～カラダとウタウ～」	6月26日・27日	振付・演出：隅地茉歩（セレノグラフィカ）、出演：隅地茉歩、阿比留修一（セレノグラフィカ）	目標値	168
		小劇場		実績値	123
4	北九州芸術劇場プロデュース／市民参加企画 合唱物語「わたしの青い鳥2021」	5月14日～7月4日	指揮・合唱指導：樋本英一 ソプラノ・合唱指導：伊藤晴 ピアノ：白石光隆 作曲：長生淳 台本演出レージョン：能祖將夫	目標値	350
		中劇場ほか		実績値	273
5	「かがみ まど とびら」	7月27日	作・演出：藤田貴大、音楽：原田郁子、衣装：suzuki takayuki、出演：伊野香織、川崎ゆり子 他	目標値	140
		小劇場		実績値	145
6	「近松心中物語」	9月25日・26日	作：秋元松代、演出：長塚圭史 出演者：田中哲司、松田龍平、笹本玲奈、石橋静河 他	目標値	1,179
		中劇場		実績値	1223
7	大人も一緒に 子どもたちの劇場シリーズ 2021ー海外編ー	1月15日・16日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	140
		小劇場		実績値	-※
8	オハッド・ナハリン／バットシェバ舞踊団「HORA」	1月25日・26日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	503
		大ホール 他		実績値	-※
9	ウィリアム・フォーサイス「Three Quiet Duets」	2月12日(中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	697
		大ホール		実績値	-※
10	北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ「まつわる紐、ほどけば風」	1月27日～2月20日	作・演出：岩崎正裕（劇団太陽族） 出演：内山ナオミ、江崎萌葉、大野朱美、木下海聖、桜井玲奈 他	目標値	419
		小劇場		実績値	344
11	北九州芸術劇場+市民共同創作リーディング 「Re:北九州の記憶」	6月～3月7日	構成・演出：内藤裕敬（南河内万歳一座）	目標値	231
		小劇場 他		実績値	307
12	子どもの劇場体験 2021～職場体験編～	8月10日～14日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響でワークショップを中止した。	目標値	30
		小劇場 ほか		実績値	-※

13	高校生〔的〕シアター	6月26日～3月 (一部中止)※	講師：守田慎之介（演劇関係いすと 校舎）※新型コロナウイルス感染症 の影響で一部中止して実施	目標値	118
		創造工房 ほか		実績値	12※
14	大学演劇ラボ 2021	10月～3月13日 (一部中止)※	講師：泊篤志、守田慎之介 ※新型コロナウイルス感染症の影 響で一部中止して実施	目標値	110
		創造工房		実績値	12※
15	劇場塾 2021— 舞台技術 セミナー	3月18日	作曲家・ピアニスト：野村誠、ダン サー・振付家：遠田誠、	目標値	50
		大ホール		実績値	44
16	市民劇場文化サポーター 育成事業	4月～3月	市民芸術文化サポーター	目標値	26
		北九州芸術劇場内		実績値	26
17	ダンスワークショップ～ Dance Dive	9月17日～12月5日	講師：松岡大（舞踏家）、中村蓉（ダ ンサー・振付家）	目標値	60
		小劇場 ほか		実績値	35
18	キタ Q アーティストふれ あいプログラム	6月30日～2月18日 (一部中止)※	講師：有門正太郎、守田慎之介 他 ※新型コロナウイルス感染症の影 響で一部中止して実施	目標値	1,000
		市内小・特別支援校		実績値	885
19	ひとまち+アーツ協働事 業	4月～1月	アーティスト：田村一行（舞踏家・ 振付家）、セレノグラフィカ、有門 正太郎、守田慎之介	目標値	60
		北九州 YMCA 学院 他		実績値	25
20	創造事業調査分析→発信 事業	6月～3月	学芸事業について調査分析及び発 信	目標値	-
		北九州芸術劇場		実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ 2020-海外編-	令和2年3月23日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	308
		小劇場		実績値	-※
2	北九州芸術劇場プロデュース/市民参加企画 合唱物語「わたしの青い鳥2020」	令和2年6月28日	[小劇場]合唱:上瀧征宏、門司智美ほか、ピアノ:岩佐靖子 [ZOOM参加]市民23名、伊藤晴、白石光隆、能祖將夫	目標値	350・80
		小劇場(ZOOMにて配信)		実績値	-※
3	「二分間の冒険」	令和2年7月25日 ~26日(中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	190・30
		小劇場		実績値	-※
4	マームとジプシー「cocoon」	令和2年8月9日 (中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	315
		中劇場		実績値	-※
5	モーツァルト 歌劇「フィガロの結婚」~庭師は見た!~	令和2年10月18日	指揮/総監督:井上道義、演出:野田秀樹 ※新型コロナウイルス感染症の影響で海外キャストを国内キャストへ変更	目標値	761
		大ホール		実績値	539
6	「ヴォイツェク」	令和2年10月31日 ~11月1日(中止)※	新型コロナウイルス感染症の影響で公演を中止した。	目標値	182
		小劇場		実績値	-※
7	「ピーター&ザ・スターキャッチャー」	令和3年1月24日	脚本:リック・エリス(脚本家・ウォルトディズニースタジオアドバイザー) 演出:ノゾエ征爾(劇団はえぎわ主宰)	目標値	786
		中劇場		実績値	218※
8	北九州芸術劇場+市民共同創作リーディング「Re:北九州の記憶」	令和3年2月20日~21日※	構成・演出:内藤裕敬(南河内万歳一座) ※新型コロナウイルス感染症の影響で一部変更して実施	目標値	231
		小劇場		実績値	178
9	子どもと大人のためのダンス「日本昔ばなしのダンス」	令和3年1月16日	構成・演出・振付:山口夏絵、近藤良平 出演:鎌倉道彦、藤田善宏、山本光二郎、近藤良平、稲村はる、宮内愛、山口夏絵	目標値	252
		中劇場		実績値	115
10	北九州芸術劇場こどもプロジェクト「あそびのじかん」	令和2年10月11日 ~12月6日※	全体コーディネーター:守田慎之介 ※新型コロナウイルス感染症の影響で一部中止して実施	目標値	40
		創造工房内稽古場		実績値	9※
11	高校生[的]シアター	令和2年12月5日 (一部中止)※	講師:平原慎太郎、守田慎之介、門司智美、脇内圭介、山口大器 ほか	目標値	100
		創造工房内稽古場		実績値	17・2※
12	劇場塾 2020~オープンレクチャー	令和2年12月26日 令和3年1月20日	講師:木ノ下裕一(木ノ下歌舞伎主宰)・吉本有輝子(舞台照明デザイナー)	目標値	60
		小劇場		実績値	64
13	市民劇場文化サポーター育成事業	令和2年4月 ~令和3年3月	市民芸術文化サポーター	目標値	30
		北九州芸術劇場内		実績値	26

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
14	ダンスダイブ～ワークショップ編～	令和2年9月13日 令和2年12月5日	講師：平原慎太郎・入手杏奈	目標値	60
		創造工房内稽古場		実績値	34※
15	キタQアーティストふれあいプログラム	令和2年9月28日 ～12月9日	講師：有門正太郎・セレノグラフィカ・中村蓉	目標値	1,000
		市内小・特別支援校		実績値	343※
16	ひとまち＋アーツ協働事業	令和2年6月 ～令和3年1月	アーティスト：有門正太郎・守田慎之介	目標値	150・60
		大ホールほか		実績値	86※
17	学芸事業調査分析→発信事業（仮）	令和2年4月 ～令和3年2月	学芸事業について調査分析及び発信	目標値	-
		北九州芸術劇場		実績値	-

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(4) 平成31年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	北九州芸術劇場プロデューサー／市民参加企画 合唱物語「わたしの青い鳥 2019」	5月10日～6月23日	指揮・合唱指導：樋本英一 ソプラノ・合唱指導：伊藤晴 ピアノ：白石光隆 作曲：長生淳 台本演出ナレーション：能祖将夫	目標値	350・80
		中劇場ほか		実績値	390・88
2	森山開次「NINJA」	7月13日	演出・振付・アートディレクション： 森山開次	目標値	396
		中劇場		実績値	315
3	めにみえない みみにしたい	7月20日～7月21日	作・演出：藤田貴大	目標値	270
		小劇場		実績値	231
4	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ —海外編—	7月20日～21日	出演：ダンス・ダンス・シター	目標値	216
		創造工房		実績値	199
5	松尾スズキプロデュース 東京成人演劇部 vol.1 「命、ギガ長ス」	7月31日～8月1日	作・演出：松尾スズキ 出演：安藤玉恵、松尾スズキ	目標値	351
		小劇場		実績値	405
6	ダンスダイブウィーク	9月15日～9月22日	アーティスト：森山開次／北村成美 出演：イマ☆タカ&イマ☆タカダンスファミリー、赤シャツダンサーズ	目標値	40・600
		北九州芸術劇場 ほか北九州市内各所		実績値	122・370
7	ギミックス	4月～9月	振付・演出： 井手茂太（イデビアン・クルー）	目標値	656・60
		小劇場ほか		実績値	447・63
8	Re：北九州の記憶	4月～令和2年2月	構成・演出： 内藤裕敬（南河内万歳一座） ※新型コロナウイルス感染防止のため関連企画を一部縮小して実施	目標値	210
		小劇場ほか		実績値	289
9	北九州芸術劇場クリエイション・シリーズ 「まつわる紐、ほどけば風」	8月～令和2年3月	作・演出： 岩崎正裕（劇団太陽族） ※新型コロナウイルス感染防止のため一部中止	目標値	768
		小劇場ほか		実績値	92・101 71
10	山海塾「ひびき（リクリエーション）」	令和2年2月23日	演出・振付・デザイン：天児牛大 舞踏手：竹内晶、市原昭仁、松岡大、石井則仁、百木俊介、岩本大紀、高瀬誠	目標値	393
		中劇場		実績値	375
11	夏休み！子どもの劇場体験2019	8月14日～8月18日	コーディネーター：守田慎之介 リーダー：穴迫信一、高野桂子 ※台風の影響に伴い一部中止	目標値	30
		小劇場、創造工房ほか		実績値	30
12	劇場塾 2019	11月30日～12月18日	講師：有門正太郎、岩崎正裕、藤岡保／神前沙織、セレノグラフィカ、マニシア／岩切正一郎／尾本章、長津結一郎	目標値	144
		大ホール、創造工房		実績値	114
13	大学演劇ラボ	9月～令和2年3月	講師：永山智行、池田美樹、福田修志、北九州芸術劇場ローカルディレクター、テクニカルスタッフ ※新型コロナウイルス感染防止のため内容を縮小して実施	目標値	80・20
		創造工房、ほか市内施設		実績値	-・22

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
14	東筑紫学園高等学校演劇類型連携事業	12月17日	講師：泊篤志（北九州芸術劇場ローカルディレクター・飛ぶ劇場代表）、北九州芸術劇場スタッフ	目標値	20
		東筑紫学園高等学校		実績値	14
15	市民劇場文化サポーター育成事業	4月～令和2年3月	市民芸術文化サポーター	目標値	28
		北九州芸術劇場内		実績値	26
16	高校生〔的〕シアター	4月～令和2年3月	講師：山崎清介／白神ももこ ※台風の影響に伴い一部中止	目標値	30
		創造工房ほか		実績値	201・33
17	キタQアーティストふれあいプログラム	11月～令和2年2月	講師：有門正太郎／守田慎之介／北尾亘／セレノグラフィカ	目標値	1,000
		市内小・中・特別支援校		実績値	515
18	ひとまち+アーツ協働事業	9月～令和2年2月	アーティスト：セレノグラフィカ／有門正太郎、守田慎之介	目標値	126 30・400
		小劇場ほか		実績値	822
19	地域のアートレパトリー創造事業	4月～令和2年3月	「ギラダンス」 振付：近藤良平 音楽：吉田トオル ※新型コロナウイルス感染防止のため内容を縮小して実施	目標値	3,000
		市内各所		実績値	296
20	北九州芸術工業地帯	4月～令和2年3月	作・演出：柴幸雄 ※新型コロナウイルス感染防止のため中止	目標値	252・360
		北九州モノレール ほか市内各所		実績値	-

(5) 平成30年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	寿歌	平成30年5月26日～5月27日	作：北村想、演出：宮城聰 出演：SPAC/奥野晃士、春日井一平、たきいみき	目標値	112
		小劇場		実績値	192
2	北九州芸術劇場プロデュース/市民参加企画 合唱物語「わたしの青い鳥2018」	平成30年5月11日～7月1日	指揮・合唱指導：樋本英一 ソプラノソロ：伊藤晴 ピアノ：白石光隆 作曲：長生淳 台本・演出・ナレーション：能祖将夫	目標値	500・100
		中劇場ほか		実績値	411・82
3	フィリップ・ドゥクフレ/DCA「新作短編集(2017)」	平成30年7月5日～7月8日	演出・振付：フィリップ・ドゥクフレ 出演：カンパニーDCA	目標値	958
		中劇場		実績値	545
4	大人も一緒に子どもたちの劇場シリーズ2018 —海外編—	平成30年7月20日～7月22日	出演：キャサリン・ウィールズ劇団(スコットランド)	目標値	270
		小劇場		実績値	267
5	マシーン・ドゥ・シルク	平成30年8月2日	演出：ヴィンセント・デュベ音楽：フレデリック・ルブラサル 出演：ヨハン・フラデット・トレパニエ他	目標値	508
		中劇場		実績値	593
6	ダンスダイブウィーク	平成30年9月9日～9月23日	出演：森下真樹 振付：MIKIKO、森山未来、石川直樹、笠井勲 ワークショップ講師：康本雅子、井手茂太 他	目標値	1,500
		小劇場、市内各所		実績値	237・87
7	Re:北九州の記憶	平成30年4月～平成31年3月	構成・演出：内藤裕敬(南河内万歳一座)	目標値	192
		小劇場		実績値	337
8	北九州芸術劇場プロデュース/九州男児劇「せなに泣く」	平成30年4月7日～12月2日	作・演出：田上豊	目標値	480
		小劇場		実績値	559
9	山海塾「Arc 薄明・薄暮」世界初演	平成31年3月23日～3月24日	振付・デザイン・演出：天児牛大 舞踏手：蟬丸、竹内晶、市原昭仁、松岡大、石井則仁、百木俊介、岩本大紀、高瀬誠	目標値	1,060
		中劇場		実績値	781
10	Stopgap Dance Company「The Enormous Room」	平成31年3月14日～3月16日	振付：ルーシー・ベネット 出演：デーヴィッド・トゥール、ハンナ・サン普森、メリツツエル・チェカ 他	目標値	91
		小劇場		実績値	109・26
11	夏休み！子どもの劇場体験2018	平成30年7月30日～8月2日	コーディネーター：守田慎之介 リーダー：穴迫信一、高野桂子 アシスタント：高野由紀子	目標値	30
		小劇場ほか		実績値	30
12	劇場塾2018	平成30年10月13日～12月21日	講師：カミイケタクヤ、守田慎之介、大月ヒロ子、多田淳之介、高橋岳蔵(劇団☆新感線)	目標値	90
		創造工房ほか		実績値	133
13	シアターラボ	平成30年7月～平成31年3月	戯曲講座講師・演出アドバイザー：泊篤志(飛ぶ劇場)アシスタント：守田慎之介(演劇関係いすと校舎)	目標値	150・35
		創造工房ほか		実績値	171・43
14	東筑紫学園高等学校演劇類型連携事業	平成30年12月～1月	講師：岩崎正裕(劇団太陽族)、加賀田浩二(北九州芸術劇場)	目標値	20
		東筑紫高等学校		実績値	51

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
15	高校生〔的〕シアター	平成30年4月～平成31年3月	講師：柴田隆弘（舞台美術ワークショップ）、多田淳之介（演劇ワークショップ）	目標値	110
		中劇場、小劇場		実績値	118
16	キタQアーティストふれあいプログラム	平成30年9月～11月	講師：北尾亘、セレノグラフィカ、有門正太郎、守田慎之介	目標値	1,000
		市内小中特別支援校		実績値	705
17	ひとまち+アーツ協働事業	平成30年4月～平成31年2月	講師：セレノグラフィカ、北村茂美、有門正太郎、守田慎之介	目標値	350
		市内福祉施設ほか		実績値	343
18	地域のアートレパトリー創造事業	平成30年4月～11月	「リバダン」振付：近藤良平 音楽：吉田トオル 「そらダン」振付：康本雅子 音楽：オオルタイチ	目標値	3,000
		市内商業施設ほか		実績値	241
19	北九州芸術工業地帯	平成30年9月～3月	「うろकिनさ」振付：康本雅子 構成：成井昭人 「モノレール公演」作・演出：穴迫信一（ブルーエゴナク）	目標値	360・300
		市内各所		実績値	474

2. 自己評価

(1) 妥当性 (平成30年～令和3年度 4か年分)

自己評価

事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。

当劇場では、北九州市が示す方向性を踏まえた以下のミッションとビジョンのもと、演劇やダンスを中心とした事業を展開している。

北九州市策定の「まちづくり基本構想」および「北九州市文化振興計画」を踏まえた北九州芸術劇場のミッションとビジョン

ミッション

- ・賑わいの拠点
内外の人が集い、繋がる
- ・地域文化の拠点
地域に根差した取り組みを行う
- ・文化創造の拠点
新たな価値・人材を生み出す

ビジョン

- ・暮らしを彩る多彩な舞台芸術を提供する - 「観る」
- ・舞台芸術を核に地域の人々と交流し、ともに育つ - 「育つ(交流・育成)」
- ・レベルの高い作品創作と発信をする - 「創る(創造・発信)」
- ・地域の創造力を高めるための支援をする - 「支える(創造支援)」

今回の策定した事業計画『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』の目標とその目標達成のために実施する事業は以下のとおりである。

事業計画『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』

【目標】文化芸術による創造的な地域の活性化と都市の再生

I. 舞台芸術活動の地域への浸透

- ◆1 賑わいの拠点として国内外の作品の受け皿や九州圏域での鑑賞の拠点施設として多彩な作品を積極的に招致することで経済効果を高める。また、舞台芸術の多様性を喚起し、新しい出会いとコミュニケーションを創出する。
- ◆2 地域や社会課題に貢献していくと共に劇場・舞台芸術への理解を広げ、地域への浸透を図る。新しい観客、劇場ファン層の増加に繋げる。
- ◆3 人材育成の拠点として表現者やスタッフなどを育成し実演芸術の水準向上を目指す。地域で活動する人材を増やす。

II. 舞台芸術を活かした都市づくり

- ◆1 芸術文化の創造発信の拠点として、また中四国・九州圏域の拠点施設として作品を創造し国内外で公演を実施することで舞台芸術の振興と発展を発信する。
- ◆2 多様な主体との連携協働を進め、舞台芸術が持つ力を市民に広く還元し、新しい地域コミュニティの創造・再生を図る。
- ◆3 多様なジャンル、幅広い年齢層に向けた作品を招聘・創造することで北九州市域外からも集客し交流人口を増やす。国内外への発信により地域のアピールとブランドアップに寄与する。

カテゴリ① 公演事業

カテゴリ② 人材養成事業

カテゴリ③ 普及啓発事業

平成31年度末から続くコロナ禍での事業実施は、中止や延期、収容人数制限などによる規模縮小の影響を大きく受けたが、そういった状況下でも感染対策の徹底をはじめ連携協働先との実施方法の調整・検討など最大限の対応を行い、全体的に概ね予定通りに進めることができた。

◎平成30年度～令和3年度までの4か年の助成対象事業数

	平成30年度	平成31(令和元)年度	令和2年度	令和3年度
公演事業	9事業 -	9事業 ※2事業	9事業 ※6事業	11事業 ※3事業
人材普及事業	5事業 -	6事業 ※1事業	3事業 ※1事業	5事業 ※3事業
普及啓発事業	5事業 -	5事業 ※2事業	5事業 ※1事業	4事業 ※1事業

※新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた事業の数(中止・一部中止または規模縮小)

ここからは、4か年分の活動の実施状況を達成目標と照らし合わせて、カテゴリごとに総括する。

カテゴリ①公演事業／演劇、ダンスを中心とした舞台芸術作品を国内外問わず招聘し上演

【事業の達成目標】* 賑わいの拠点／経済効果を高める／多様性の喚起と新しい出会い、コミュニケーションを演出する(目標Ⅰの◆1)
* 北九州市域外からも集客し交流人口を増やす／地域のアピールとブランドアップに寄与する(目標Ⅱの◆3)

●幅広い年齢層をターゲットに多様なジャンルの作品を上演

→子ども向けから若年～中年～高年層をターゲットに演劇だけでなくダンスや舞踏、オペラなど多彩なジャンルの作品の鑑賞機会を提供した。令和2年度を除き達成率は80%となり、地域における賑わい拠点としての役割を果たしていると考えられる。新型コロナウイルス感染拡大の影響を大きく受けた令和2年度は51%にとどまったが、そういった状況下でも試行錯誤しながら様々な対策を講じ、実施できた事業の中には70%を超えたものもある。こういった影響も踏まえると、当初計画からは全体的に少し縮小した形での実施となった。

●ダンス作品を中心とした海外作品の招聘・上演

→中規模の作品を中四国・九州圏域では当劇場のみで上演したことで、世界への窓としての機能を果たし、新しい表現との出会いを市内外に向けて広く創出した。ただし、令和2～3年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で出入国に関して厳しい状況が続いたため中止となり、その機会をさらに創出することが出来なかった。

カテゴリー①公演事業／第一線で活躍するアーティストや地域住民とともに地域に根差したオリジナル作品を創作し発表・上演

【事業の達成目標】* 劇場・舞台芸術への理解を広げ地域への浸透を図る／新しい観客・劇場ファン層の増加<目標Ⅰの◆2>

* 中四国・九州圏域の拠点施設として作品を創造し国内外で上演／舞台芸術の振興と発展を発信<目標Ⅱの◆1>

●継続的に地域住民との作品創作を実施

→小学3年生以上の地域住民を対象に市民参加による作品創作(令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止)を毎年度継続して実施することで劇場や舞台芸術への理解を地域に浸透させることができた。上演時には参加者の家族や友人などこれをきっかけに劇場にはじめて足を運ぶ来場者も多く見られ、こういった取組を通して新しい観客を創出した。また、幅広い世代と一緒に作品発表に向かい練習を重ねる過程を通して、世代間交流の促進の場としての機能も果たせたことは地域にある文化拠点としての使命の一端を担うことができたと考えられる。

●劇場オリジナル作品や共同製作による作品を創作し上演

→第一線で活躍するアーティストや地域の表現者との作品創作に継続して取り組み、北九州以外の九州圏域で公演を実施。舞台芸術の振興と発展を上演という形で発信したが、令和2年度の兵庫県伊丹市での公演が新型コロナウイルス感染拡大の影響で中止となったため、九州以外での発信については十分に取り組むことが出来なかった(令和3年度の延期公演ではライブ配信を実施)。また、地域で活動する人材を中心とした出演者やスタッフと共に創ることで地域の創造源を確保し地域の文化拠点としての役割を果たしている。

カテゴリー②人材養成事業／地域の未来を担う子どもたちや地域表現者スタッフなど舞台芸術に関わる人材、芸術文化を担う人材の育成を行う

【事業の達成目標】* 劇場・舞台芸術への理解を広げ地域への浸透を図る／新しい観客・劇場ファン層の増加<目標Ⅰの◆2>

* 人材育成の拠点として実演芸術の水準向上を目指す／地域で活動する人材の増加<目標Ⅰの◆3>

●教育機関や幅広い年齢層の地域住民と共に舞台芸術に関する様々な取組を実施

→地域で唯一芸術コースを持つ高校との連携や18歳以上の幅広い年齢層の地域住民とともにワークショップや講座を実施し、舞台芸術や劇場への理解を広げた。地域住民らによるサポート活動ではメンバーの約63%が2年間の活動終了後も劇場文化を支えるOB・OGでの活動を希望し継続していることから、より長く深く劇場との関係性を持つ層が着実に増えている。

●各世代や地域の芸術分野関係者などに向けて舞台芸術の力を使った様々な取組を実施

→地域における人材育成の拠点として、世代ごと(小学生・高校生・大学生・社会人向け)や、地域の表現者を含む舞台芸術分野に携わる人材向けに演劇づくりの場の提供や実践的なレクチャーを実施。特に、期間限定劇団を作り演劇創作を学ぶ事業では、そこでの活動を通して劇作家や俳優として活動を継続する人材が出てくるなど、着実に地域で活動する新しい表現者を輩出している。

カテゴリー③普及啓発事業／地域の文化拠点として、舞台芸術の力を育み活用し、地域課題の解決に向けた取組や地域において新しい発想を生み出す環境づくりを行う

【事業の達成目標】* 劇場・舞台芸術への理解を広げ地域への浸透を図る／新しい観客・劇場ファン層の増加<目標Ⅰの◆2>

* 多様な主体との連携協働を進め、市民に広く還元し新しい地域コミュニティを創造・再生<目標Ⅱの◆2>

●劇場内外で舞台芸術の力を活用した参加型・創造型事業などを様々な年齢層を対象に実施

→市内小中学校へのアウトリーチやまちなかでのパフォーマンス、地域資源を活用した作品創作などを実施。対象も広く一般としたものから子どもや親子、大学生、表現者向けなどターゲットを絞り、地域にあるニーズも意識してプログラムの内容をブラッシュアップして丁寧に実施することで、劇場や舞台芸術への理解を広げるとともに劇場ファン層の増加にも寄与していると考えられる。また、継続して実施している学校アウトリーチ事業では、特別支援学校・学級の先生らのリピート率やロコミによる広がりが見られ、舞台芸術の力やそれに対する理解が着実に浸透している。

●地域にある企業や他分野の団体と連携し舞台芸術創造活動を実施

→地域にある様々な主体と連携協働し、就労支援が必要な若者や障がい者、外国人留学生、商業施設や地元プロサッカーチームなどと芸術体験プログラムや作品創作・発表の実施を通して、多様な人々が舞台芸術に触れ交流する機会や互いの価値観を知り合う場を創出。連携協働先・アーティスト・劇場の3者が活動における中期ビジョンを共有しながら着実に活動を継続していくことで、連携協働先が主体となってアーティストとともに活動を続ける動きが出てくるなど、新しい地域コミュニティの創造につなげることができた。

自己評価

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

●文化的意義

世界 40 か国以上で活躍する舞踏カンパニー・山海塾との共同製作や作品上演をほぼ毎年度実施。世界で活躍するカンパニーとの共同製作は国内外への発信において大きな意味を持つとともに、その創作活動を支援していくことで我が国の芸術文化の質の担保と向上に大きく貢献している。

また、世界的振付家として注目を集めるフィリップ・ドゥクフレや障がいの有無を超えた身体表現ダンスカンパニーStopgap Dance Company など芸術性の高い作品を他館と連携し国内への招聘を実現。当該地域のみならず中四国・九州圏域の鑑賞拠点施設としての役割を果たしている。

その他にも国内の第一線で活躍する振付家・演出家を招き創作した「ギミックス」や「まつわる紐、ほどけば風」では、全国から出演者を募り質の高い作品を創造発信した。「まつわる紐、ほどけば風」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で関西での公演は中止となったがライブ配信を実施、「ギミックス」では宮崎・熊本 2 か所で初の九州内ツアーを開催し、その作品性を広く発信した。

●社会的意義

地域課題の解決を目的に実施している「ひとまち+アーツ協働事業」では、地域の様々な領域の団体やアーティストと協働し舞台芸術の力を地域に還元している。引きこもりや不登校など様々な悩みを抱える若者たちを対象に実施した芸術体験プログラムでは、演劇創作の過程を通してコミュニケーション力や表現力、仲間と協力し生み出す喜びを提供し、復学や就労に踏み出す若者も多く参加者の新たな一歩につながっている。また障がい者とその家族などが参加したダンスプロジェクト“レインボードロップス”は、ダンス作品としてのクオリティも担保しつつ、それぞれの個性を認め合いながら唯一無二の存在であることを作品に込めるという豊かな創作プロセスを実現することができた。平成 31 年度の公演以降は、協働先が主体となってアーティストとともに商業施設や障害者芸術祭でのパフォーマンス活動を継続中であり、劇場から発した事業が地域社会へ根付いた事象として、他館からのヒアリングや事例紹介プレゼンテーション（おおいだ障がい者芸術文化支援センター、東京芸術劇場主催社会共生オンラインセミナーなど）の依頼があるなど全国から注目を集めている。

高齢者の記憶を聞き取り作品創作につなげる「Re：北九州の記憶」では、孤立化が進む高齢者と若手劇作家が直接出会い交流を深め、当該地域の歴史やその記憶を掘り起こし演劇的に発信する試みを続けている。事業に参加した高齢者が若者に刺激を受け演劇作品を自ら創作したり、出来上がった戯曲を活用し市内施設と連携して“記憶”を継承する取組では参加者の定着が見られるなど、新たなコミュニティ創りに寄与し持続的な展開につながっている。

いずれも複数年を掛けて取り組み、劇場が地域社会との関係性を強化することで新たなつながりも生みながら地域への貢献度を高め、劇場の存在意義を示すことができたと考える。

●経済的意義

賑わいの拠点として多彩な作品を招致することで、他県からの来場者を確保し交流人口の増加につながっている。また集客やカンパニー招致によりホテルや地元航空会社等の利用も促進し地域経済の活性に寄与し経済効果を高めている。

市民を巻き込んだ参加型事業「ダンスダイブウィーク」の“夕暮れダンス”では、商店街の飲食店と協力しパフォーマンスを実施。公募の市民ダンサーが踊り街を盛り上げることで注目を集め、集客力アップや商店街の活性につながるとともに、市民ダンサー自身も新たな価値観と出会い生きがいを創出した。「地域のアートレパートリー創造事業」では、地元プロサッカーチームや商業施設と連携しオリジナルダンスを制作・発表。街のイメージアップや双方の新たな顧客創出に寄与した。

これらを含む人材養成・普及啓発事業では、地域の表現者がアウトリーチやワークショップの講師として活躍。表現者自身の創造性を活かしたプログラムを劇場も関わりブラッシュアップすることで、質の高いプログラムを地域へ提供しリピート率は着実に上がっている。表現者が地域の中で活躍する新たな産業となり、地域住民が芸術文化を享受する機会の拡大につながった。

(2) 有効性 (平成30年～令和3年度 4か年分)

自己評価

目標を達成し、アウトカムの発現は可能か。

当劇場では『文化・芸術による創造的な地域の活性化と都市の再生』を目標に、「Ⅰ.舞台芸術活動の地域への浸透」「Ⅱ.舞台芸術を活かした都市づくり」を達成するため、それぞれに以下の指標を設定し各事業に取り組んでいる。

平成31年度末以降は新型コロナウイルス感染拡大の影響で設定した数字に届かない指標もあったが、最大限の対応を行いながら事業に取り組み、地域に根差した劇場としてのアウトカムの発現につなげることができていると考える。

以下、各指標の達成度合いを示していく。なお、平成31年度途中に指標の再設定を行っている。アウトカムの発現については3枚目の表で示すものとする。

Ⅰ.舞台芸術活動の地域への浸透

「舞台芸術活動の地域への浸透」に対して、4つの指標を設けた。指標◇-1と指標◇-2については概ね達成することができた。指標◇-3や指標◇-4はコロナ禍において達成は厳しい状況である。このような状況から、現時点では十分に目標を達成しているとは言い難い。しかしながら、地域に存在し続ける芸術文化の拠点施設として、これから先も舞台芸術の多様性を喚起するプログラムを構成しつつ、他領域の主体と丁寧に関係性を築き舞台芸術の持つ創造力を活かした事業を継続して実施していくことで、地域への浸透をさらに深めていく。

【指標◇-1 九州圏域における舞台芸術の多様性の喚起】

演劇・ダンスそれぞれにおいて、「公演事業」「人材養成事業」「普及啓発事業」のプログラムを構成し、舞台芸術の多様性を提示する指標を設定。指標の公演事業(演劇・ダンス)の割合=43%程度維持に対しては、コロナ禍で公演が中止となるなど目標数値を満たさない年度もあったが、概ね40%程度を維持している。全体としては、令和3年度までの平均が演劇62%(公演22%、人材養成20%、普及啓発20%)、ダンス38%(公演14%、人材養成9%、普及啓発15%)となった。公演、人材養成、普及啓発事業それぞれのプログラムを充実して実施することで、舞台芸術の多様性を示していく。

【指標◇-2 地域課題への取り組み】

地域課題への取組を進めるために、普及啓発事業のうち地域課題要素を含む事業について指標を設定。地域の課題を複合的に捉え、舞台芸術の持つ創造力を活かして活動の拡がりを生む取組みとして5項目を掲げた。〈若者世代の活性化(就労支援等)〉については「大学演劇ラボ」や「ひとまち+アーツ協働事業」などの複数事業で積極的に取り組むことができたため増加となった。コロナ禍で計画通りに進めにくい状況が続いているが、連携先と感染対策や実施方法などについて協議しながらほとんどの事業を実施することができたため、その他項目についても堅持している。

【指標◇-3 劇場ファン層の増加】

劇場ファン層を増加させるため北九州芸術劇場での鑑賞経験〈初～2回〉の来場者層を増加させる指標を設定。基準の平成29年は40%、指標の令和4年度は42%で、令和3年度までの平均は34%であった。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けてはいるものの、新規の来場者数を伸ばすことが出来ていない。顧客満足度の向上と新たな劇場ファンの獲得を目指し、令和2年度より会員制度の見直しを行い、コアなファン層向けの有料会員と新規ファン層向けの無料会員の2つの層をもつ会員制度に変更。無料会員制度である“チケットクラブQ”の登録者数は11,724人(令和4年3月末現在)となっており徐々に増加していることから、今後は新規で無料会員制度に登録した層を、2回目以降の来場へと結びつけるよう戦略的にアプローチを行い、新しい観客層の獲得に努めていく。

【指標◇-4 事業に関わる地域の表現者、スタッフの育成】

地域の表現者とスタッフの育成のため、事業に係る若者世代(10代～30代)の割合を堅持していく指標を設定。平成30年度～令和3年度までは70%以下にとどまっておらず、指標の令和4年度の約75%には届いていない。これは新型コロナウイルス感染拡大の影響による事業の中止や延期、劇場や稽古場等で利用人数の制限がかかったことによる減少だと考えられる。稽古場等の利用人数の制限は解除の見通しが立たないため、これまでよりも広い会場を手配するなど対策を取り、事業を進めていく。

Ⅱ.舞台芸術を活かした都市づくり

「舞台芸術を活かした都市づくり」に対して、4つの指標を設けた。指標◇-1と指標◇-2については、コロナ禍の影響を受けつつも、感染対策を徹底しあゆみを止めることなく事業を進めることができた。指標◇-3と指標◇-4は新型コロナウイルス感染拡大による影響により実施できなかった事業もあり、指標の達成にはばらつきが見られた。今後はコロナ禍という状況も鑑みながら、地域の社会課題やそこに住む人々のニーズに向き合いながら舞台芸術を活かした取り組みを通して、地域の活性化をさらに進めていく。

【指標◇-1 長期継続事業における舞台芸術作品の創造・発信】

舞台芸術作品創作の枠組として「市民参加型」「地域資源発掘・活性型」などの創造事業を年間2事業実施することを指標として設定。基準となる平成29年度は3事業、指標の令和4年度は2事業。平成30年度～令和3年度まで毎年2～3事業を実施し指標を達成している。地域に根差した作品づくりを継続して行い、劇場の取組についても発信していく。

【指標◇-2 地域にある多様な主体との連携・協働】

地域にある多様な主体・芸術文化以外の4分野との連携・協働を指標として設定。基準となる平成29年度は4分野、令和4年度の指標は4分野の維持。平成30年度6分野、平成31(令和元)年度5分野、令和2年度4分野、令和3年度4分野を実施し、指標を達成することができた。

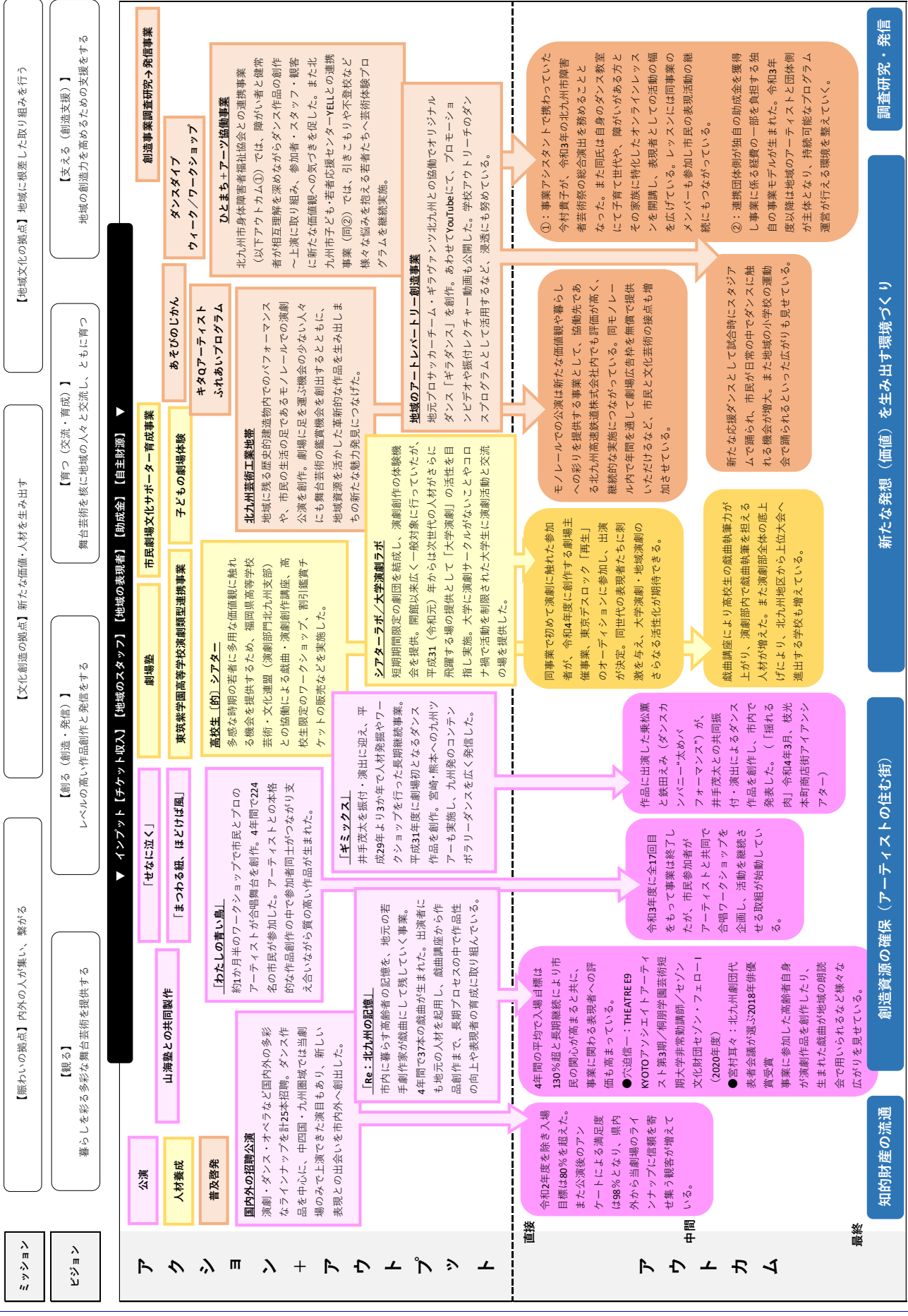
【指標◇-3 幅広い年齢層に向けたアプローチ】

幅広い年齢層にアプローチし、事業参加の世代間格差を緩やかにする指標を設定。特に、〈小学生以下〉〈高校生以下〉の割合増加を目指しているが、平成31年度から続く新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、その世代を主なターゲットとした公演やワークショップの中止・延期が続いたことが影響し、達成が難しい状況が続いている。現在もコロナ禍は続いているが、感染対策を行いながら安心して劇場に来れることを発信し、引き続き幅広い層をターゲットに事業を実施していく。

【指標◇-4 国内外へ向けた情報発信による支持者の拡大】

情報発信による支持者の拡大としてWEBを活用した情報発信の指標を設定。令和2年度と令和3年度はホームページ閲覧数が減少。これは新型コロナウイルス感染症拡大により、公演などの中止・延期が増加し、劇場に足を運ぶ環境が整わなかったことが影響していると考えられる。しかし令和2年4月～6月の劇場休館時期に職員でソーシャルメディアを使った発信企画チームを発足し、劇場に足を運びにくい時期にも市民とつながる企画を実施。Twitterで劇場にまつわるクイズなどを発信したり、YouTubeで劇場紹介動画や生配信企画などを実施するなど、TwitterのフォロワーやYouTubeチャンネル登録者数の増加につなげた。SNSを使った発信に劇場スタッフが広く関わることで多角的な発信を行い、今後も情報発信による支持者の拡大を進めていく。

有効性 (平成30年～令和3年度) のロジックモデル



知的財産の流通

創造資源の確保 (アーティストの住む街)

新たな発想 (価値) を生み出す環境づくり

調査研究・発信

①: 事業アシスタントで携わっていた今村貴子が、令和3年の北九州市障害者芸術祭の総合演出を務めることになった。また同氏は自身のダンス教室にて子育て世代や、障がいがある方とその家族に特化したオンラインレッスンを開講し、表現者としての活動の幅を広げている。レッスンには同事業のメンバーも参加し市民の表現活動の継続にもつながっている。

②: 連携団体側が独自の助成金を獲得し事業に係る経費の一部を負担する独自の事業モデルが生まれた。令和3年度以降は地域のアーティストと団体側が主体となり、持続可能なプログラム運営が行える環境を整えていく。

モノレールでの公演は新たな価値観や暮らしへの彩りを提供する事業として、協働先である北九州高速鉄道株式会社内でも評価が高く、継続的な実施につながっている。同モノレール内で年間を通して劇場広告等を無償で提供いただけるなど、市民と文化芸術の接点も増えつつある。

新たな応援ダンスとして試合時にスタジアムで開かれ、市民が日常の中でダンスに触れる機会が増え、また地域の小学校の運動会で開かれるといった広がりが見えている。

同事業で初めて演劇に触れた参加者が、令和4年度に創作する劇場主催事業「東京デロスロ」のオーディションに参加し、出演が決まった。同世代の表現者たちと刺激を与え、大学演劇・地域演劇のさらなる活性化が期待できる。

戯曲講座により高校生の戯曲執筆力が上がり、演劇部内で戯曲執筆を担える人材が増えた。また演劇部全体の底上げにより、北九州地区から上位大会へ進出する学校も増えている。

作品に出演した乗松薫と鉄田えみ(ダンスカンパニー「太めが」)が、井手茂太との共同演出・演出によるダンス作品を制作し、市内で発表した。(「揺れる肉」令和4年3月、桜光本町商店街アイアンアター)

令和3年度に全17回目をもち、市民参加者がアーティストと共同で合唱ワークショップを企画し、活動を継続させる取組が始動している。

4年間の平均で入場目標は130%超と長期継続により市民の関心が高まると共に、事業に関わる表現者への評価も高まっている。

● 六迫信一: THEATRE9

● KYOTOアソシエイトアーティスト第3期/桐朋学園芸術短期大学非常勤講師/セゾン文化財団ゼノン・フェロー(2020年度)

● 宮村耳々: 北九州劇団代表者会議が選ぶ2018年俳優賞受賞

事業に参加した高齢者自身が演劇作品を制作したり、生まれた戯曲が地域の朗読会で用いられるなど様々な広がりを見せている。

令和2年度を除き入場目標は80%を超えた。また公演後のアンケートによる満足度は98%となり、県内外から当劇場のラインナップに信頼を寄せ集う観客が増えている。

4年間の平均で入場目標は130%超と長期継続により市民の関心が高まると共に、事業に関わる表現者への評価も高まっている。

● 六迫信一: THEATRE9

● KYOTOアソシエイトアーティスト第3期/桐朋学園芸術短期大学非常勤講師/セゾン文化財団ゼノン・フェロー(2020年度)

● 宮村耳々: 北九州劇団代表者会議が選ぶ2018年俳優賞受賞

事業に参加した高齢者自身が演劇作品を制作したり、生まれた戯曲が地域の朗読会で用いられるなど様々な広がりを見せている。

シスターラボ/大演劇ラボ

短期間限定の劇団を構成し、演劇制作の体験機会を提供。開館以来広く一般対象に行っていたが、平成31(令和元)年からは次世代の人材がさらに活躍する場の提供として「大演劇」の活性化を目指し実施。大学に演劇サークルがないことやコロナ禍で活動を制限された大学生に演劇活動と交流の場を提供した。

地域のアーティスト創造事業

地元プロサッカーチーム・ギラヴァンツ北九州との協働でオリジナルダンス「ギラダンス」を制作。あわせてYouTubeにて、プロモーショナルビデオや振付レクチャー動画も公開した。学校アウトリーチのダンスプログラムとして活用するなど、浸透にも努めている。

北九州芸術工業地帯

地域に残る歴史的建造物内でのパフォーマンスや、市民の生活の足であるモノレールでの演劇公演を制作。劇場に足を運ぶ機会の少ない人々にも舞台芸術の鑑賞機会を創出するとともに、地域資源を活かした革新的な作品を生み出し、その新たな魅力発見につなげた。

高校生(的)シアター

多感な時期の若者に多様な価値観に触れる機会を提供するため、福岡県高等学校芸術・文化連盟(演劇部門北九州支部)との協働による戯曲・演劇制作講座、高校生限定のワークショップ、観引鑑賞チケットの販売などを実施した。

「おまじない」

井手茂太を振付・演出に迎え、平成29年より3か年で人材発掘やワークショップを行った長期継続事業。平成31年度に劇場初となるダンス作品を制作。宮崎、熊本への九州ツアーも実施し、九州祭のコンテンツポラリーダンスを広く発信した。

「わたしの青い鳥」

約1か月半のワークショップで市民とプロのアーティストが合唱舞台を制作。4年間で224名の市民が参加した。アーティストとの本格的な作品創作の中で参加者同士がつながり支え合いながら質の高い作品が生まれた。

「おまじない」

井手茂太を振付・演出に迎え、平成29年より3か年で人材発掘やワークショップを行った長期継続事業。平成31年度に劇場初となるダンス作品を制作。宮崎、熊本への九州ツアーも実施し、九州祭のコンテンツポラリーダンスを広く発信した。

(3) 効率性 (平成30年～令和3年度 4か年分)

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

4年間において、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、中止や延期、規模縮小など事業期間を変更せざるを得ない状況ではあったものの、実施形態の工夫や適切な対応を行い、概ね当初の計画通りに実施することができた。

●平成30年度

助成対象19事業に取り組み、ほぼ計画通りに実施することができた。

→公演事業では国内外の芸術性の高い作品や幼児や子ども向けの作品、社会的価値を持つ作品など多様な作品を上演し、当初の計画通りに遂行することができた。また作品上演だけでなく、事前レクチャーやワークショップなど関連企画の実施に取り組み、劇場や舞台芸術への興味や理解をさらに深める機会を提供できた。人材養成・普及啓発事業についても、ほぼ計画通りの実施となり、概ね目標に到達した。「キタQアーティストふれあいプログラム」の学校アウトリーチは、プログラム実施校の児童数が少子化の影響もあってか目標に達することが出来なかったが、実施回数は当初予定を上回った。

●平成31(令和元)年度

助成対象20事業に取り組み、一部の事業で期間の変更等があったが、概ね計画通りに実施することができた。

→2月末以降の事業においては、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けた。「まつわる紐、ほどけば風」では初日公演のみ上演し、その後の公演は関西での公演を含め中止となった。また「北九州芸術工業地帯」でのモノレール公演も公演中止となったが、県外からのアーティストの招聘や、2日間にわたる出演者オーディションの実施など、多様な対象者に向けてアプローチでき、今後につながる新たな関係性を築くことができた。人材養成・普及啓発事業については、台風や新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け実施期間を縮小せざるを得ない状況となったが、講師とともにプログラムの見直しを行うことで、実施内容自体は大きな変更なく進めることができた。

●令和2年度

助成対象17事業を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により5事業が中止、3事業が一部中止・延期・規模縮小、その他の事業も計画の一部変更などを行った。

→コロナ禍において、公演事業として初のオペラ公演や親子向けの作品などを実施したものの、全体入場率は51%にとどまった。人材養成・普及啓発事業については、計画の変更や実施規模の縮小など感染防止対策の徹底や実施形態を工夫することで、学校行事が例年通りに行われず、人との出会いや体験の機会が奪われている子どもたちに向けて、演劇やダンスを通して新しい価値観や創造性に触れ、視野を広げる機会を提供することができた。

●令和3年度

助成対象20事業を実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、海外アーティストが来日出来ない状況となったため海外作品3事業が中止、夏休み時期に実施予定だった2事業が中止・一部中止、再拡大の影響で年明けの学校アウトリーチ等も一部中止となったが、その他事業については概ね計画通り実施した。

→公演事業では、ダンス作品や親子向けの作品、市民参加の合唱作品など、幅広い演目を予定通り実施。入場率88%を達成し、舞台芸術の多様性を提示し幅広い年齢層に新しい価値観との出会いを創出することができた。人材養成・普及啓発事業についても、利用人数の制限がある中ではあるが感染防止対策の徹底や実施形態を工夫することで、概ね大きな変更なく進めることができた。

市民参加型の事業「わたしの青い鳥」、高齢者へのインタビューや取材を行い独自の作品を創作する事業「Re:北九州の記憶」、第一線で活躍する人材をクリエイション・パートナーとして招聘し2年間という長いスパンで地域と劇場に向

き合い作品を創作する事業「まつわる紐、ほどけば風」など、アーティストや地域の表現者との関係性を深めている長期継続の事業では、コロナ禍においても、作品創造を止めることなく関連企画の映像配信や劇場初となる公演のライブ配信を実施した。4年間を通して、多少事業期間の変更が生じたものの、入場者数の目標値もほぼ達成しており、レベルの高い作品創作と幅広い層に向けて事業の主旨や目的を発信するという目的を果たせたといえる。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

4年間において、一部の事業で予算額と実績額で乖離が見られたものや新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、全般的に事業費は当初の計画より縮小した形での実施となった。

●平成 30 年度

助成対象経費の総額 予算額 83,966,000 円／実績額 69,515,894 円／要望比:82.79%(予算との差 17.21%減)

→一部の事業において乖離が見られたが、全体で見ると当初の予定に比べ 17.21%事業費が減額となった。大きな乖離が見られた事業は、いずれも協働相手のある事業であった。プログラムの見直し等により「東筑紫学園高等学校演劇類型連携事業」では、文芸費、舞台費が大幅に減額(予算との差 99.74%減)。劇場と本市を拠点とする企業等とが協働して行う「地域のアートレパトリー創造事業」では、振付料や舞台費が減額(予算との差 44.28%減)となった。

●平成 31(令和元)年度

助成対象経費の総額 予算額 83,287,000 円／実績額 62,610,853 円／要望比:75.17%(予算との差 24.83%減)

→当初の予算より減額となるものが見られ、乖離が大きくなった。年度末から新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、関西での公演を全日程中止したことで当初予定より大幅な減額となったことが大きな要因のひとつである。人材養成・普及啓発事業では、全般的に実施期間の短縮やプログラムの見直しにより講師料やアシスタント謝金が減額となった。収入面においては、「ひとまち+アーツ協働事業」で連携先の団体側が助成金申請を行い採択される事例があった。劇場だけでなく地域の様々な領域の団体との連携・協働による実施形態を継続的にいき、互いに信頼関係を築いてきたひとつの結果と捉えることができる。

●令和 2 年度

助成対象経費の総額 予算額 81,755,000 円／実績額 49,564,770 円／要望比:60.63%(予算との差 39.37%減)

→新型コロナウイルス感染拡大の影響による北九州市からの劇場閉館の要請(4月9日～6月18日)やそれに伴う事業の中止や規模縮小により、当初予算に比べて全体的に支出が減少し、当初の計画通りに進めることは総じて難しくかった。「フィガロの結婚」では、感染拡大や海外キャスト招聘の見通しがつかない中、キャスト変更や全体スケジュールの再調整、それに伴う地元の楽団・合唱メンバーの再調整が発生したことにより、文芸費が大きく増額した。「Re:北九州の記憶」では、学校鑑賞が中止になったが、感染拡大や収容人数制限の影響も見越して一般公演を2回→3回に変更し、収入減の影響を最大限に抑えできるだけ多くの鑑賞機会を設けた。

●令和 3 年度

助成対象経費の総額 予算額 89,135,000 円／実績額 65,562,309 円／要望比:73.55%(予算との差 26.45%減)

→新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止となった4事業では、チラシの印刷費、宣伝費等の支出はあったが、その他の費目がほぼ減額となった。感染対策費としてPCR検査費が増額となったことなどにより、一部の事業で実績額が予算額を上回った。また「近松心中物語」では、舞台セットが大規模になったため運搬費が増額となった。全体としては、中止となった4事業を除いた場合、要望時の予算額と報告時の実績額とを比較すると、その差は2,647,113円(予算との差4.1%減)であり、ほぼ計画通りに執行できたと考える。

(4) 創造性 (平成30年～令和3年度 4か年分)

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性に優れている(と認められる)か。

当劇場ではこれまでも、開館当初から続けてきた作品づくりの経験やノウハウを活かした独自の公演や、スポーツや観光、福祉などの他領域との協働による革新的なプログラムなど、様々な形で地域の芸術文化を牽引し、向上させる取組を行ってきた。対象となる4か年を通しては、これまでに生み出された企画を続けながらよりブラッシュアップして実施すると同時に、新たな視点での企画や創作活動にも取り組み、特に地域との向き合い方について、手を組むだけでなくそこで生まれたものをさらに浸透させ広げていくことにも力を入れた。その結果、当劇場ならではの独創的な作品創造や斬新なプログラムの創作と、それらを上演・実施し広げていくことにより北九州ひいては九州圏域全体の芸術文化を牽引することにつなげることができた。

●当劇場の資源たるキーパーソンの存在、および助成対象活動への反映について

劇場プロデューサー

開館以来、劇場の事業計画やラインナップ内容の責任者としてプロデューサー制を導入しており、現在は開館当初からの職員を育成しプロデューサーとして登用している。これまで一貫して地域と劇場に向き合ってきた経験と視点をもとに、北九州という地域のもつ歴史や特性、主な観客層や来場者の居住エリア、まだ劇場の事業が十分に届いていない世代や領域など、様々な事情を考慮したうえで企画や作品創作、公演の招聘を行い、より地域に根差した事業展開を可能にしている。

ローカルディレクター

地域で活動するアーティスト2名を「ローカルディレクター」として配置している。劇団飛ぶ劇場を主宰し、劇作家、演出家として第一線で長く活動する泊篤志は、主に地域の演劇人との交流や作品づくりへのアドバイスを通して劇場との橋渡し役を担っている。「高校生〔的〕シアター」や「シアターラボ」等の人材養成事業では、学生から一般市民まで、対象に合わせて事業を企画・コーディネートし、劇作家・俳優をはじめとした多くの演劇人の育成に寄与している。また劇団演劇関係いすと校舎の代表である劇作家・演出家 守田慎之介も、ともに上記育成事業に関わる他、学校アウトリーチを実施するアーティストとしても積極的に関わりながら、そうした活動を通して地域の現状を把握し、稽古場を活用して子どもたちが演劇や劇場に親しむきっかけを作る事業を実施した。また両名ともに、全国の演劇関係者との関係性の構築や地域とのつなぎ役も担っており、後述の「クリエイション・パートナー」との作品づくりにも深く関わりながら、本公演に先駆けて短編2作を作・演出しカフェにて上演するなど、地域への多角的なアプローチとクリエイションの多様性を提示した。

地域の表現者(俳優・ダンサーなど)

「ひとまち+アーツ創造事業」「キタQアーティストふれあいプログラム」など、全国からアーティストを招いてワークショップやアウトリーチを行う際、アシスタントには地元の人材を積極的に起用している。第一線で活躍するアーティストと同じ現場を経験することは、対象との向き合い方や接し方、プログラムの構成や進行など多くを学ぶことができる機会となっている。また、そうしてアシスタントを経た地元アーティストにその後ワークショップやアウトリーチの講師依頼をすることで、アーティストが地域で長く活動する土壌や環境づくりにもつなげている。

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性に優れている（と認められる）か。

●助成対象活動の独創性・新規性・先導性について

独創性

- ・開館翌年より続く市民参加作品「わたしの青い鳥」は、8歳から80歳代まで幅広い年齢が一緒に参加できる本格的な舞台として市民に愛されてきた。ここまで広い年齢層での作品創作は全国的にも希少であり、親子3世代での参加も少なくない。学生から社会人、高齢者まで様々な環境の人々が一堂に会して稽古、本番へ向かうために、練習方法や進行、演出やパート割に至るまで細かな工夫を凝らしながら実施しており、参加者はもちろん、関わるスタッフも含めた総合的な創造力が必要とされる、北九州芸術劇場ならではのコンテンツである。
- ・令和3年度で10年目を迎えた「Re：北九州の記憶」は、“高齢者の記憶を戯曲にして残す”という新しいアイデアを形にし、創作を続けてきた事業である。インタビューをもとに高齢者それぞれが呼び起こした記憶が物語となり多くの観客の胸を打つとともに、インタビュー対象者もこれをきっかけにまわりの人とのコミュニケーションをとり始めたり、観劇するために劇場へ出向いたり新たな目標や生きがいを得ることとなった。作家には地元の若手劇作家を起用し、創作の過程で高齢者へインタビューを行い、それをもとにフィクションとして戯曲を書き上げるという独自の仕組みを用いている。構成・演出の内藤裕敬による戯曲講座の中で戯曲をさらにブラッシュアップしていくなど、この事業を通じて作家の育成というミッションにも取り組んでおり、公演（作品創造）事業でありながら人材養成と普及啓発も担う、大変稀有な事業であるといえる。
- ・北九州市身体障害者福祉協会との協働事業であるダンスプロジェクト“レインボードロップス”では、2年間にわたり創作したダンス作品『こんなにも、家族』（平成31年度）を上演した。障がいのあるなしに関わらず、参加者たちが一緒に作品を創り上げることで、福祉分野との協働としても、またバリアフリーの観点からも、参加者と観客それぞれに新たな気づきや価値観を生み出すきっかけを作ることができた。また、構成・演出のセレノグラフィカとのタグによるクオリティを重視した作品創作にもこだわり、ワークショップの発表の場ではなくダンス作品の公演として、より多くの人々に向けてのアピールや発信を行い、芸術性にも優れた、他に例を見ないプロジェクトを完成させた。
- ・「まつわる紐、ほどけば風」では、演出家・岩崎正裕をクリエイション・パートナーとして招聘。1年目は地域を知るためのリサーチや市民との交流、2年目に作品づくりを行うという、長いスパンでの実験的な作品創作に取り組んだ。劇場と手を組み地域と向き合う中で得たものが反映された作品を上演できたことに加え、岩崎氏のモノづくりへの視点や発想、ノウハウが、関わったキャストやスタッフを通して地域に還元されるという好循環を生んでいる。広範囲に影響を与えたこの試みは、新たなパートナーを迎えて令和4年度以降も継続予定である。

新規性

- ・井上道義指揮／野田秀樹演出という鬼才のタグによる「フィガロの結婚」（令和2年度）では、自主事業としては初めてのオペラ公演に取り組んだ。作品を上演するだけでなく、地元の楽団である「響ホール室内合奏団」がオーケストラを担当し、コンサートマスターには北九州出身のバイオリニスト・南紫音を配するなど、北九州ならではの作品づくりを目指した。また、公演に合わせて地元で活躍する声楽家を集めた合唱団を結成し、作中にて合唱パートを担当。第一線で活躍するオペラ歌手や俳優との共演を通して、地域の音楽家たちにとって大変得難い経験を提供することができた。公演当日には、井上氏や野田氏のファンはもちろん、地域の音楽家や愛好家、劇場によく訪れる演劇ファンも集まり、ジャンルの垣根を越えバラエティに富んだ、熱気にあふれた客席の中で上演することができた。

- ・当劇場ではこれまで「北九州芸術工業地帯」の企画として、工場夜景クルーズ船の船上や市内を走るモノレールの車内など北九州市固有のロケーションを舞台にした作品創作にも取り組んでおり、観光的要素はもちろん、北九州市民にとって見慣れた場所に新しい価値を見出す機会としても大いに注目を集めてきた。その流れを受け、門司港栄華の象徴とも言われる築90年の旧料亭 三宜楼にてダンス公演『うろきんさ』（平成30年度）を上演した。場所や歴史からインスピレーションを得たアーティストとともに、歴史的建造物を舞台にダンス・音楽・演劇（朗読）が交錯するという今までにないジャンルレスで革新的な作品を創作し、大きな話題を呼んだ。

先導性

- ・世界を舞台に活躍する舞踏カンパニー・山海塾の新作公演「Arc 薄明・薄暮」（平成30年度）では、世界に向けたワールドプレミア公演を北九州にて行った。国内だけでなく海外からの注目度も大変高い山海塾作品の世界初演を行うことで、世界レベルの舞台芸術を身近な場所で鑑賞する機会を観客に提供するとともに、世界に向けた発信やアピールにもつながり、我が国の芸術水準の底上げに寄与した。
- ・公演事業については国内の主要劇場と共同で海外作品を招聘することも多く、特にダンス演目においては、日本初登場や関西以西では北九州のみでの上演となるものもあり、九州をはじめとした近隣の圏域に向けて、上質な作品の貴重な鑑賞機会を提供する役割を担っている。
- ・九州の新たなダンスムーブメントを生み出すことを目指して実施したダンスクリエイション「ギミックス」（平成31年度）では、井手茂太が北九州に滞在して作品を創作し、北九州・宮崎・熊本にて上演した。各地の主催者と協働しながらワークショップも実施（大分ではワークショップのみ実施）、新たなつながりや各地のダンサーとの交流が生まれるとともに、上質な作品を九州で循環させることで、九州全体のダンス文化の底上げにもつなげることができた。
- ・「Re：北九州の記憶」においては、前述のとおり“高齢者の記憶を戯曲にして残す”というテーマでの作品創作を行っているが、公演の形態はさまざま、本公演やリーディング公演をはじめ、近年は戯曲や作品を残すだけでなくそれを地域の中で活かすことを目指し、市民センターや市立図書館での朗読上演会なども行っている。こうした取組は、作品を生み出した後、それを地域に広げてアーカイブしていくひとつのモデルケースとしても注目されており、視察やヒアリングの要望も多く、同様の枠組で事業を企画する地域も出てきている。ここで生まれた戯曲とそこに込められた“記憶”が地域の財産として残っていくような取組を今後も続けていきたい。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

4 か年を通して「公演事業」「人材養成事業」「普及啓発事業」それぞれにおいて、外部メディアからの客観的な発信獲得と自社メディアからの主体的発信を行い、劇場や事業への理解促進と支持者の拡大に努めた。外部からの発信は、プログラムの特性や新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり主に北九州市内および九州圏内にとどまったが、一部事業にて全国紙での記事掲載や、先駆的なプログラムへの視察受入等を通して広く国内へ当劇場の取組を発信することもできた。一方、地方都市ではメディア方針として事前記事に重きが置かれることや、評価を担える人材自体の不足という課題もある。そのため主体的発信をより強化していけるよう、平成 31 年度には公式 LINE、令和 2 年度には公式 Instagram を新たに立ち上げた。このように各事業の特性を踏まえた発信と、多様化するメディアの活用も模索しながら、着実な評価向上につながったと考える。

◎メディア掲載実績（助成対象事業のみ）

紙媒体・WEB	テレビ・ラジオ
1,762 件	154 件

◎自社メディア活用状況（訪問数は 4 年間累計、登録者数は令和 3 年度末時点の数字）

WEB サイト 訪問数	Twitter 登録者数	LINE 登録者数	Instagram 登録者数	YouTube 登録者数	Facebook 登録者数	メールマガジン 登録者数
718,101 人	7,525 人	1,402 人	757 人	757 人	524 人	7,003 人

●全国区での評価

平成 18 年よりパリ市立劇場との共同プロデュースで実施している舞踏カンパニー・山海塾の公演では、平成 30 年度に新作「Arc 薄明・薄暮」の世界初演を行い、日経新聞と朝日新聞の 2 紙にて取り上げられた。同公演後には世界ツアーが予定されていることも報じられ、世界的カンパニーの公演を本市でいち早く見られるという地域のアピールにもつながった。

地域課題と向き合いプログラムを行う「ひとまち+アーツ協働事業」では、平成 31 年度に北九州市身体障害者福祉協会との協働でダンス作品を創作。平成 25 年のプレ事業から 7 か年の継続で発展して来た同事業は、障害者福祉×舞台芸術の先進的事業として全国の自治体や公共施設から関心が寄せられており、令和 3 年度までに 8 件の視察受入や外部講師の派遣を行っている。同じく平成 31 年度に本市と兵庫県伊丹市で上演を予定していたオリジナルの演劇作品「まつわる紐、ほどけば風」では、制作発表会見を両市で実施。新型コロナウイルス感染拡大の影響により上演が北九州初日公演のみとなり掲載に至らないものもあったが、今後の関係性構築にもつながった。また公演中止時には、未曾有の事態に直面した現場の声を Twitter で発信。リツイート 1,422 件、いいね 2,300 件と、劇場 Twitter 開設以降で最も大きな反応となり、舞台芸術界内外へ劇場の存在意義を提示した。令和 3 年度の延期公演は北九州公演のみであったが、関連企画として YouTube での短編作品の配信（再生回数 515 回）や、公演のライブ配信（視聴券販売数 100 人）も行い、全国の観客にも届けることができた。

またコロナ禍による劇場休館あけ直後の公演として実施した「フィガロの結婚」では、長らく劇場へ訪れることの出来なかった観客への期待に応える取組として、Twitter にてゲネプロ動画の配信や、出演者らによる公演カウントダウンメッセージの配信を実施。全 7 回の総再生回数は 30,014 回となり、九州圏域のみならず全国の演劇・音楽・舞台芸術ファンからの反応が寄せられた。

●九州圏域での評価

平成 30 年度には、作・演出・出演を九州出身のメンバーのみで構成したオリジナルの演劇作品「せなに泣く」を創作。新たな創造作品の形として、制作発表会見のダイジェスト（再生回数 1,021 回）や、公演に向けた出演者紹介（再生回数 1,541 回）など動画を活用した発信も積極的に行い、“九州男児”をモチーフに描く地域性の高い内容と相まって開幕前から期待を寄せられた。公演後には地元の主要四紙にて取り上げられ、特に読売新聞（平成 30 年 12 月 15 日付）では「舞台芸術制作における九州演劇界の底力を改めて示した」と評され、九州圏域の拠点施設としての評価を高めた。

また平成 31 年度には、井手茂太振付による劇場初のオリジナルダンス作品「ギミックス」を創作し、九州内ツアー（宮崎・熊本）を実施。九州圏域ではコンテンポラリーダンスの公演数が多くないため、集客だけでなく作品への期待値を高めることや理解を促すための発信にも重点を置き、YouTube にて計 5 本の動画を公開、4,234 回の再生回数を獲得した。来場した観客からは「初めてのコンテンポラリーダンスは難解ではあったが、自分なりの解釈を探求する面白さを感じた」といった声も寄せられ、九州圏域の拠点施設として、舞台芸術の多様さや新たな価値観を県内外へ提示することができた。

●市内近郊での評価

市民参加型の創造事業として開館翌年より実施してきた「わたしの青い鳥」は、令和 2 年度に最終ステージを迎える予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期。延期を惜しむ参加者や観客の声に応えるため公演予定同時刻にオンライン企画を実施し、実施予定であった中劇場のキャパシティを超える 1,093 人（アーカイブ含む）に視聴いただいた。平成 30 年度～令和 3 年度（令和 2 年度は中止）の総参加者数は 224 名にのぼり（最終ステージまでの総参加者数は 1,408 名）、最終年度には「人生の終盤で音楽の楽しさを知り、沢山の方と出会えた」（80 代男性）、「忙しい毎日の中で忘れていた大切なことに気づける貴重な時間でした」（40 代女性）など、参加者から多くの感謝の声が寄せられ、同事業が市民の生活に深く根付き、劇場への愛着と信頼を高めていたことを示している。

前述した「ひとまち＋アーツ協働事業」のうち、若者の就労支援を行う地域団体との協働で行った芸術体験プログラムは「悩み抱える若者の表現力育成。参加者、再就職する成果も」と西日本新聞（令和 2 年 1 月 26 日付）で報じられ、地域社会と向き合う劇場の姿を発信することができた。また令和 3 年度には、コロナ禍で孤立化の進む留学生を対象に日本独自の前衛舞踊・舞踏の体験プログラムも実施した。参加した留学生からは「日本独自の身体表現を体感する中で、日本ならではの感性に触れることができた」といった感想が生まれるなど、文化芸術を通じた他者理解や新たな国際交流の形を見出すことができた。

また「北九州芸術工業地帯」のプログラムとして実施した、歴史的建造物内でのダンス・音楽・演劇（朗読）の融合によるパフォーマンス『うろきんさ』では、公演後に地元三紙で舞台写真とともに大きく取り上げられ、特に読売新聞（平成 30 年 10 月 3 日付）にて「地域に根付いた舞台芸術の発信を目指す北九州芸術劇場の志向が示された、挑戦的な試みだった」と高く評された。

●SNS を通じた広がりや自社メディアによる発信

平成 30 年度に地元プロサッカーチーム・ギラヴァンツ北九州との協働で創作した「ギラダンス」（「地域のアートレパトリイ創造事業」内）では、コロナ禍でうち時間が増える中、SNS でダンスを踊って投稿して貰う参加型企画を実施。ギラヴァンツ北九州の選手にも広報協力として参加いただき、YouTube で公開した振付レクチャー動画等の再生回数は 4,109 回、SNS 上に投稿された動画の再生回数は 10,979 回となり、スポーツと舞台芸術との領域横断による地域のアピールやブランドアップにも寄与した。

令和3年度には「人材養成事業」や「普及啓発事業」の年間レポートを作成し、公演来場者への配布や家庭へのポスティングなど、事業参画者以外にも劇場の取組と成果を広く周知した。またレポートの一部は Instagram でもアーカイブとして公開するなど、オンライン発信の強化にも取り組んでいる。

●「Re：北九州の記憶」での取組

令和3年度に10年目となった「Re：北九州の記憶」は、市民・観客・作家・出演者・スタッフなどあらゆるステークホルダーからの信頼や評価向上につながっている事業である。まちに暮らす高齢者の記憶から地元の若手劇作家が戯曲を執筆し、地元の俳優が演じるというプログラムは、高齢者の社会参画、地域文化の未来を担う人材の育成、作品を通じた地域の魅力発信など、多様な視点から毎年メディア取材も絶えず、4年間でのメディア掲載数は144件にもものぼる。また令和2年度にはYouTubeでのリーディング動画配信（再生回数2,413回）も行うなど、劇場への来場機会の少ない若年層への企画浸透にも取り組んでいる。10周年を迎えた令和3年度には、西日本新聞（令和4年3月23日付）にて「市民一人一人の中にある記憶から創作する物語が積みあがった結果、壮大な記憶遺産となりつつある（中略）次世代に残したい記憶はまだまだ残っているはずで、さらなる記憶の掘り起こしも望む」と大きな評価と期待を寄せられた。

令和3～4年度には（当初予定は令和2～3年度）「創造事業調査分析→発信事業」として、本事業の「事業実施による成果」と「地域への波及効果」を評価分析する取組も実施している。中間報告段階ではあるが「北九州の演劇活動の底上げに繋がり、今まで劇場と疎遠だった高齢者が劇場に足を運び、劇場の必要性が広く認知されることが、地域の芸術的民度をあげることに繋がる」といった専門家からの評価が寄せられた。令和4年度には東京公演も決定しており（北九州市以外での上演は初）、地域性と公共性を踏まえた全国的にも稀有な事業として、さらなる発信と評価の向上に努めたい。

* 本文内の再生回数等は令和4年3月末現在の数字。

(5) 持続性 (平成30年～令和3年度 4か年分)

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する(と認められる)か。

●事業計画を実施した4年間の組織活動の変化

事業運営、経営戦略、人事戦略、ネットワークの各面において、本事業の事業計画において掲げた計画のもと(P)、多岐に渡る取組を行い(D)、着実な変化が見られていると考える。今後も、この変化を持続的な成長へとつなげるため、取組の結果を振り返り(C)、新しい課題の発見と改善に努めることで(A)、更なる発展を見込むものである。

当財団は、北部九州域でも有数の文化拠点である「北九州芸術劇場」、全国的にも優れた音響効果を誇る音楽専用ホール「響ホール」、芸術文化活動支援施設「大手町練習場」の3つの芸術文化施設等の指定管理者として施設の管理運営を行うほか、芸術文化活動の振興に関する事業、埋蔵文化財の発掘調査等を行い、市域の芸術文化活動の振興に総合的に取り組んでいる。

近年、コロナ禍による舞台芸術活動の制限やライフスタイルの多様化、加えて北九州市が抱える人口減少の問題や高齢化に伴う課題など、時代の変化は大きく、地域が抱える課題も多い。そんな中、財団が目的とする「市民生活の向上と市民の豊かな芸術文化の振興に寄与」するには、財団の組織強化が必要との観点から、平成30年度より組織目標のコンセンサスづくりと個人の能力を最大限引き出し活用する方法を検討(P)。中長期的なビジョンのもと、令和2年度から組織改正、人事制度改正を行い(D)、組織機能の向上と個々の職員の能力の向上を図っている。また、改正後も効果的な運営体制を整えられているかの見直しを行い(C)、令和4年度には財団の経営基盤強化を担当する経営企画室を新設するなど、厳しい状況の中でも、持続可能な組織運営を可能とするべく真摯に取り組んでいる(A)。

また、本助成金の事業計画においては、持続可能な創作活動の体制確保のために必要な事項として「職員間の中期ビジョンの共有」「継続的な作品制作現場への劇場スタッフの起用」を掲げている。本事業の実施に当たっては、当財団の運営計画とともに上記の2点を特に意識し、助成金投入によるアウトカムの発現を狙うものである。

事業運営

今後の当財団の安定した事業運営には財団職員の能力を培い、組織の力を向上させることが必要であるとの認識から以下の取組を行った。

- ・高い専門能力を身に着けた財団有期職員の無期雇用を可能とするキャリアアップ制度を導入。
- ・職員から事業運営・経営に関わる人材を育成するため、各分野に専任チーフポストを配置。
- ・総合力の高い人材の継続した雇用と長期的な活躍を実現するため主任制度と主任総合職の定期昇給制度を導入。
- ・劇場運営に係る多方面の知識を持つ人材を育成するため、一定の勤続年数を経て専門的なスキルを培った人材のジョブローテーションを開始。

これらの取組により、財団内のキーポストを担う優秀な人材や各分野に精通したゼネラリストを育成し、長期的に当劇場に働く人材を確保する環境を整備。本助成金の事業計画において、持続可能な創作活動の体制確保のために必要な事項として掲げた「継続的な作品制作現場への劇場スタッフの起用」を実現しつつあるものと考えている。しかし現場の職員の負担感は未だ大きく、ベテラン職員の退職・異動により、新人職員の育成に時間を割かれるなど、過渡期ならではの苦労も多い。職員の働きやすい環境を整えるよう、労務管理、業務計画、人材育成を総合的に組み立てることが今後の課題である。

経営戦略

平成31年4月1日から令和6年3月31日まで、北九州市の指定管理者として指定を受け、指定管理料収入を基礎とした財務基盤を確保した。また、当劇場のこれまでのノウハウを活かした福祉団体との連携事業では、経費の一部を外部団体が負担する事業モデルを実施。積極的な外部資金の獲得に努めている。

今後はさらに多様な財源確保を検討。令和2年度には、経営基盤を築き、新規事業の企画・実施を行うための部署を新設。顧客ニーズに即したサービスの提供や財源確保のため、会員制度の見直しを行った。令和4年度には、更なる運営財源の獲得と財団の経営基盤の強化を図るため組織体制を見直し、経営企画室を新設。財源の多様化を図る一方で財団のブランディング、SNSでの展開にも注力。令和4年4月から、財団のブランディングと収益化を狙い財団オリジナルグッズの販売を開始。今後も持続可能な運営のため、幅広い可能性を模索し戦略的なファンディングに取り組む。

人事戦略

職員の無期雇用を可能とするキャリアアップ制度の導入、専任チーフポストの配置、主任制度と主任総合職の定期昇給制度の導入、ジョブローテーションの導入のほか、職員のスキルアップを図り多様な研修を実施。国内トップクラスのアーティストによるインリーチ、学校アウトリーチの現場視察、OJT など多様な学びを提供し、組織で活躍する総合的な人材の育成を図った。

外部研修への積極的な参加も推奨。福岡県文化団体連合会主催地域文化芸術フォーラム、文化庁・全国公立文化施設協会九州支部主催・地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会、全国劇場・音楽堂等アートマネジメント研修会、(一財)地域創造ステージラボ 等に参加。

また、館長から外部委託スタッフまで、劇場で働く全職員が一堂に会し、担当業務に限らない自由な発想で劇場における新たな企画を考える「夢を語る会」(平成30年度劇場職員研修)や、スタッフ同士でこれからの組織運営や発信の企画立案を行う「プラン会議」(平成31年度)では、在籍年数や年代を越えて互いの考えや組織のビジョンを共有し意見交換を行い、ここで出た提案が部署を越えて具現化していくなど、現場スタッフ間のコミュニケーションや関係性構築にも力を入れている。

これらにより、より高度な人材の育成と、本助成金の事業計画において掲げた「職員間の中長期ビジョンの共有」を図るものである。

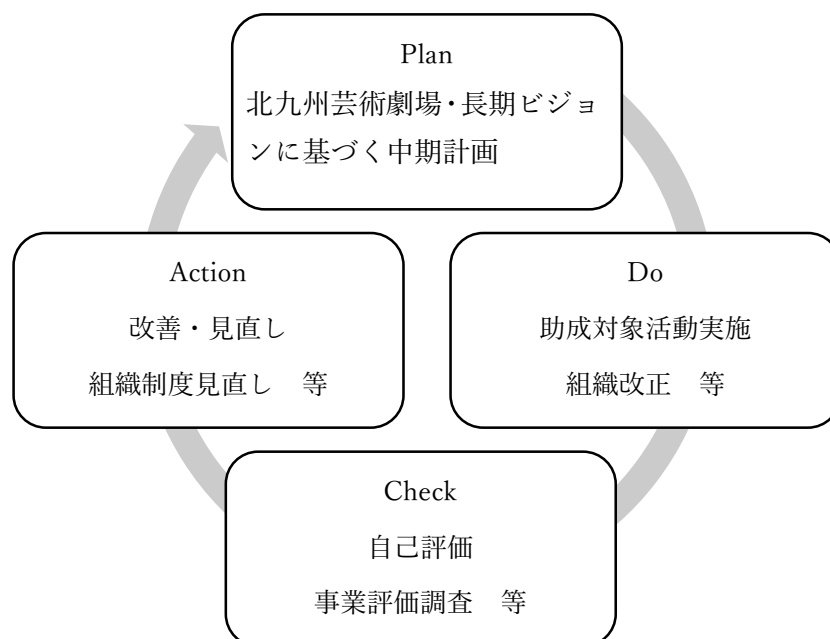
ネットワークの構築

首都圏や中部、関西地方にある劇場との連携協力による海外演目の招聘や各劇場製作の作品の上演などにより、国内の劇場・音楽堂等とのネットワークを構築。

また、九州圏域の地方公共団体の文化行政担当者、近隣の公立文化施設関係者、地域を担うコーディネーター、アーティストの育成及びネットワークの構築に資する研修事業「劇場塾」の実施や、地域の様々な領域の団体(北九州市身体障害者福祉協会や北九州市社会福祉協議会等)とアーティストが協働し舞台芸術の持つ力を活かして地域課題を解決する「ひとまち+アーツ協働事業」の実施を通し、地域に根差した公共劇場として、舞台芸術分野はもちろん多方面の分野と協力・連携するネットワークを構築することができた。

●組織活動の持続的発展

本助成金における事業計画「創造都市＝クリエイティブ・シティ実現に向けた『北九州芸術劇場・長期ビジョンに基づく中期計画』」と助成の趣旨をもとに具体的な企画を練り(P)、各助成対象活動を実施(D)。自己評価等の機会を活かした振り返り(C)をもとに検証を行い、改善案を組み立て(A)、次の計画につなげている。また、本助成金での自己評価はもちろんのこと、外部機関に委託して実施している事業評価調査、定期的な指定管理者、市外郭団体としての活動状況報告等の機会を活かした振り返りや、組織、個人の目標設定、個人の自己評価を通じての振り返りを実施しており、組織としての課題を発見し、更なる成長へつなげるための取組を行っている。コロナ禍や不安定な世界情勢による不確定な状況も多いが、本助成金の投入を契機としたPDCAサイクルを継続して活用し、組織、個人の能力の向上を図っていくことで、組織活動の持続的な発展を目指す。



自己評価

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

●持続的なアウトカムの発現・定着への期待

(2) 有効性で示したとおり、本事業において実施した様々な事業は社会的な変容へとつながっており、アウトカムの発現は概ね確認できると考える。この社会的変容は、その内容から一時的なものにはとどまらず、一定期間、本地域の特性として効果を発揮することが期待されるものである。また、助成金投入によりもたらされたアウトカムを持続的に発現・定着していくことで、文化芸術による創造的な地域の活性化と都市の再生の実現へ着実に進んでいくことが可能であると考えます。

なお、本事業で期待される4つのアウトカムについての持続的な発現・定着への期待は以下のとおり。

知的財産の流通

本助成金によって、地方においても首都圏と変わらず舞台芸術を享受できる環境を作るとともに、中四国・九州圏域を牽引する役割を果たし地域のネットワークを形成することができた。ここで形成された環境と地域ネットワークは、本事業終了後も得難い財産として本地域に残り、今後も継続して地域住民が優れた芸術文化を市民が享受する機会の拡大と本地域の文化芸術の振興に寄与するものである。

創造源の確保（アーティストの住む街）

第一線で活躍するアーティスト、地域の創作者・表現者、市民が一体となり、創造活動に挑戦することで、劇作家や表現者の育成を果たし、地域の創造的な活動の場を広げることができた。

「Re:北九州の記憶」は、市内で暮らす高齢者の記憶を地元若手劇作家が戯曲として残していく事業。4年間で37本の戯曲が生まれた。事業の長期継続により、市民の関心が高まると共に、事業に関わる表現者への評価も高まっている。また、参加した高齢者自身が演劇作品を創作したり、ここで生まれた戯曲を地域の表現者が主体となり朗読会で用いたり、事業のみならずその後の活動も様々な広がりを見せている。

新たな発想（価値）を生み出す環境づくり

「ひとまち+アーツ協働事業」等での舞台芸術が持つ創造的な力を活かし、教育、福祉等多様な領域と連携して地域の課題の解決を図る試みは、参加者に新たな価値観への気づきを促した。この試みは、地域や多様な団体に受け入れられ、連携団体側が独自の助成金を獲得し事業に係る経費の一部を負担する事業モデルが生まれた。新たに外国人留学生や児童養護施設との取り組みにも着手しており、今後は、地域のアーティスト、多様な団体、劇場が協働し、持続可能なプログラム運営を行う環境を整えていく。

調査研究・発信

事業実績データ及びアンケート調査データに基づく定量評価とテーマ別のグループインタビュー等による定性評価を合わせた事業評価を実施。さらに、「創造事業調査分析→発信事業」として、「Re:北九州の記憶」の事業実施による成果と地域への波及効果を評価分析する取り組みも実施している。

これらにより、劇場の社会における役割や効果について深慮し、新たな事業展開の企画・実施につながった。今後も、データ分析、評価に基づく調査研究・発信の成果を活かし、地域における文化拠点としての使命の一端を担っていく。